

新しい尿沈渣染色液の検討

久保 俊美, 吉田 恵三子, 山本 慶和, 松尾 収二 (天理よろづ相談所病院)

ステンハイマー染色液に用いられているアルシャンブルー-8GXにかわる色素を使用した染色液の染色性および沈渣に及ぼす影響について検討した。

【対象および方法】

受診者尿 40検体を対象とした。染色液は 2% メチレンブルー液と 0.75% ピロニン B 液を 2% EDTA 溶液で作製し各々を 2 対 1 および 1 対 1 で混和した N 染色液と、N2 染色液を作製した。

検討は、1) 細胞の染色性、2) 赤血球有形残存率、3) 細胞の保存性について無染色、S 染色、N 染色および N2 染色の 4 法で比較し、細胞の保存性については、沈渣 200 μ l に各々の染色液を 50 μ l 添加した溶液のまま室温保存した。標本作製は技師会の推奨する方法に準じた。

【結果および考察】

N 染色の背景は青く、核や細胞質の染色態度は S 染色液より若干暗紫色気味であった。N2 染色は S 染色に近い色であった。両 N 染色液とも添加後数分置くと、核は藍色に細胞質は赤紫色に染色され判別しやすくなった。両者と

も核の染色に優れ、中でも好中球がよくわかり、白血球と尿細管上皮の鑑別が容易であった。封入体様細胞の封入物は過染傾向にあり、細胞質との区別が難しかった。S 染色は赤血球を凝集させることがあったが、N 染色 1、2 は赤血球凝集がみとめられなかった。赤血球有形残存率は S 染色、N 染色とも染色液添加直後の -20% から +40% だった。また 4 時間後までの血球有形残存率は S 染色液とも -60% で有意差は認められなかった。細胞の保存性は、2ヶ月後の染色性は当初に比べ、移行上皮の核の萎縮と細胞の濃染傾向がみられたが、各上皮、赤血球、白血球、卵円形脂肪体、異型細胞、各種円柱を鑑別することができた。特に円柱の保存性に優れていた。

【まとめ】

N_{new} 染色液は S 染色液と変わらない染色性を持ち、好中球の判別、赤血球数のカウントが容易であった。また細胞の保存性にすぐれた染色液であったが、今後、細胞質の過染、赤血球の残存率の改善が検討課題である。

連絡先 0743-63-5611 (8929)